

九章

靈の生活

他界にある霊

〔三三三〕 肉体を去った霊はすぐ再生するのですか。

「すぐ再生するものもあるが、多くは大なり小なり一定の期間をおいて後再生する。高級の天体では、一般に再生がすぐ行われる。高級天体の物質は低次の天体の物質に比しずっと精妙だから、そこで肉体をもって生活していても、霊的能力はだいたいは維持している。彼等の常態は諸君等の高度な神憑状態にある」

〔三三四〕 再生までの間、魂はどうなっていますか。

「彼等は新しい運命に憧れて、遍歴する霊となる。それは待つ者、期待している者という状況である」

——その期間はどのくらい続きますか。

「それは数時間から数千年まで。厳密に言うると、その期間には一定の制限というものではなく、場合によっては、永い間延長されることもある。しかし永久ということはない。晩かれ早かれ、霊は前生の浄化に最も効果的な次の新生を始めることが出来

る」

——この遍歴継続期間は、靈の意志に基づくのですか。それとも、罪滅ぼしとして課されるのですか。

「これは靈の自由意志の結果である。靈は十分な分別をもって行動する。しかし、場合によって期間が長いのは、神により課せられる罰である。それ以外の場合は、自由意志により自ら延長しているのであって、この期間中、靈のままに出来る限りの有効な修業をするためである」

〔三三五〕 すると遍歴するのは、靈に未熟な点があるしるしですか。

「いや、遍歴する靈にはいろいろな段階の靈がいる。前にも述べたが肉体をとる方が過渡的な状態で、靈の本来の姿とは、物質から離れている状況の方である」

〔三三六〕 肉体をまもっていない靈は、すべて遍歴していると言うことは正しいのですか。

「そうだ、再生しなければならぬ靈の場合は、そのとおりである。但し、完全に達

した清浄霊の場合は遍歴しない。彼等はそれで最終の状態である」

〔注解〕 霊にはそれぞれの資質というものがあって、順次たどる進化の過程により、段階が存在する。それを状態の上から見ると、次の三種である。①受肉霊、即ち、肉体をまとっている霊。②遍歴霊、肉体をまとわず、進歩のために次の再生を待っている霊。③清浄霊、即ち、完全に到達し、もはや再生を必要としない霊。

〔三三七〕 遍歴霊はどのようにして学習をしますか。それは人間とはやり方が違うでしょうね。

「彼等は自己の過去を検討して、更に進歩への道を探る。眼前に展開する諸事象を觀察する。優れた人の話や上級の霊の助言に耳を傾ける。こうして新しい観念を獲得する」

〔三三八〕 霊にも人間的な友情がありますか。

「高級霊は、肉体を去る時、人間のもつ悪い感情の面を捨て去り、善い愛のみを残している。だが未熟な霊は、地上的な欠陥をいろいろ残している。そうでなければ高

級靈ということになる。」

〔三二九〕 地上を去る時、靈が悪い感情を捨ててしまわないのは何故ですか。彼等は、悪い感情が不幸を生むことを、その時には分かる筈ですから。

「人間の中には、例えば、極度に嫉妬深い人達がいる。諸君はこういう人々が、死とともに、たちまちその欠点を失うと思うか。地上を去つて後、靈には、特に感情的な靈の場合には、過去の悪感情を保持する一種の雰囲気が残る。つまり、彼等は完全に物質の影響から離れたわけではないのだから。彼等は、これから先自分が辿るべき、真理の道の閃きを感じることは滅多にない」

〔三三〇〕 遍歴の状況下にあつて、靈は進歩しますか。

「改善の努力その熱意に比例して、大きな進歩を遂げる。但し、ここで獲得した観念を実践に移すのは、地上世界においてである」

〔三三一〕 遍歴靈というのは、幸福ですかそれとも不幸ですか。

「それは本人次第である。感情的なものが多ければ苦しみ多く、物質的なものから離

れていれば、それに応じて幸福を感じる。遍歴の状況下で、靈はどうしたら幸福になれるかと、自分に欠けているものを身につけたいと熱望する。しかし、再生したいと望んでも必ずしも直ぐ出来るわけではないので、遍歴の状態が永びくことその事が、彼等の罰となる」

〔三三三〕 遍歴靈は、どんな天体にでも入ることが出来るのですか。

「それは本人の進歩の程度いかんによる。靈は肉体を去った時、必ずしも物質と無関係になったわけではなくて、今まで住んでいた天体、ないしはそれと同程度の天体に所属しているわけである。もし地上生活で、もっと高い世界の段階にまで進歩していなければである。このような進歩こそ、あらゆる靈の不変の目的である。それなしでは、完全に到達することは不可能だから。しかしながら、より高級の天体に靈が入ってみることもある。だがこの場合には、彼にその天体は未だ肌に合わないように感じられる。彼はいわば、未だその天体がほんののぞき見が出来る程度なのである。だがこれによって、彼の改善と進歩への熱意はしばしば進められ、これに

よって、彼は現在の遍歴の時代を有効に過ごし、やがてはその天体に住めるようになるのである」

〔三三三〕 既に浄化している靈が、低い段階の天体へ行くことがありますか。

「その天体の進歩を助けるために、頻繁に彼等へ行く。もしそれがなければ、これらの天体に指導者もないままに、低い段階に止まったままになるだろう」

過渡的な世界

〔三三四〕 今までの話によつて、遍歴靈がとどまったり休んだりする世界というものがある存在しますか。

「ある。これらの靈を受け入れるのに適しており、彼等が一時的に住む世界というのがある。つまり、これらの靈が暫時休む逗留場とまりゆう、長い遍歴の後の休息場——それはある意味では退屈な状態だが、そのような場がある。これらの世界は、各段階の世界の中間境であつて、やがてそれぞれの世界へ入ることになつていく靈の質に応じ

て区別されている。だから自己に応じたその場へ入ると、彼等は快適な休息感を感じるのである」

——そこに住む靈は、意のままに其処を離れることが出来ますか。

「できる。彼等がやがて行かねばならぬ何処へでも、ここを去って行くことが出来る。彼等は恰も渡り鳥、休息のため島に降り、元気を回復して目的地へと向かう」

〔三三五〕 靈がその過渡的世界に滞在中、進歩をしますか。

「進歩する。こうして集まった彼等は、教訓を胸に叩き込み、より早く高い所へ行けるように更には最終目的である完全へ向かうために、進歩する」

〔三三六〕 この過渡的世界は、特別の性質をもっていて、永久に遍歴靈の滞在の場と認められているのですか。

「いや、世界体系の中で占めるこれらの世界の位置は、一時的なものにすぎない」

——そこには地上的な生物も住んでいますか。

「いや、その表面は不毛であって、そこに住むものは、地上的欲求は何一つもつてい

ない」

——その不毛というのは永久にそうなのですか。また、その世界の特質のためにそうなっているのですか。

「そんなことはない。不毛は一時的なことにすぎない」

——では、そういう世界なら、自然の美などはないと考えられますが。

「その美は、地上の自然の美に勝るとも劣らぬ美しさである。これまことに無尽の創造の妙と申すべきか」

——その世界が単に一時的のものとするれば、吾が地球も、いつかはそういう状態になるのですか。

「地球はかつてその状態であったことがある」

——それは何時のことですか。

「生成の途中において」

靈の知覚、情緒、苦しみ

〔三三七〕 魂が靈の世界に帰つて来てても、地上生活中にもつていた感覚をまだもつていますか。

「もつている。それだけでなく、地上で持っていなかったものまでも持っている。何かかというと、地上時代には肉体があつて、ヴェールのように色々なものを隠していたのだから。知性は靈の一つの属性であつて、肉の目隠しがはずされると、一層自由に發揮される」

〔三三八〕 靈の知覚や知識は無限ですか。つまり、靈は何でも知っていますか。

「靈は完全に近づくほどに、多くのことを知る。高級の靈は広い知識をもっているが、低次の靈は何事も知識が乏しい」

〔三三九〕 靈は事物の第一原理を理解しておりますか。

「それは靈の進歩と浄化の程度による。低位の靈は人間ほどにも分かつていない」

〔三三〇〕 靈には、人間のようには時間の觀念がありませんか。

「ない。諸君は何でも月日や時代で物事を考えるが、それでは我々靈のことは一向に分からない」

〔三四一〕 靈は、私共以上に、現在についての正確な視野をもつものですか。

「それは人間と比べれば、まさに目明きと盲人の違いがある。靈には諸君に見えないものも見える。従つて諸君とは違った判断をする。だが、これも靈の浄化程度によつて違うことを、覚えていて貰いたい」

〔三四二〕 靈はどのようにして過去のことを知るのですか。また、靈は無限に過去を知ることが出来ますか。

「我等は過去にちよつと目を向けさえすれば、恰も現在の出来事のように、それを知ることが出来る。丁度諸君が過去の強い印象的な事を思い出す具合に、正確に知ることが出来る。ただ違うところは、人間のように肉体で、もはや目を曇らされることがないから、人間の記憶からは隠れて分からないことでも思い出す。しかし、

靈なら何でも知っているわけではない。例えば、我々はどのようにして創造されたか、こんなことは分からない」

〔三四三〕 靈は未来を予知しますか。

「これもやはり靈の進歩いかんによる問題である。靈は部分的ひんぼんになら頻繁ひんぱんに未来を予知している。但し、はっきり未来を予知しても、これを洩らすことは必ずしも許されていない。靈が未来を見るのは、まるで現在の事のようにそれを見るのである。靈は神に近付くに応じてはっきり未来を予知できる。死後、魂は自己の過去のすべてを、一望のもとに見、これを会得する。だが、神の胸三寸の中にある自己の未来を見ることは出来ない。このような予知は、唯、永い過去を経て神と完全に一つになっている靈にとつてのみ可能なことである」

——絶対の完全に到達した靈は、完全な未来の知識をもつのですか。

「完全という語はふさわしくない。神のみが一切の主である故、何ものも神と全く等しくなることは出来ないのだから」

(二四四) 靈は神を見ますか。

「最高級の靈のみが神を見、神を知る。低い段階の靈は神を感じ、神を察知する」

——低い段階の靈達は、自分はこれこれの事を神に許されているとか、これは禁じられているとか言いますが、そういう決まりを神がしているということを、彼はどのようにして知るのでですか。

「彼は神を見ないが、神を感じている。そこで、これはしてはいけないとか、言っただけでいいとか言う時は、直覚や目に見えぬ警告で感じるわけだ。それは諸君も、為すべしとか為すべきでないとか、心の奥に感じをもつことがあるのではないか。それは我々として同じ事だ。ただ、もっと高い程度に感じるわけだ。靈の本質は人間よりもしなやかなことである。従って、神の警告を人間よりもっとうまく受け取ることが出来る。これは諸君にも容易に分かることだろう」

——神の命令は、神から靈へ直接伝えられるのですか。それとも他の靈の仲継を通すのですか。

「命令は神から直接くることはない。神と直接交通するためには、それだけの資格が

備わらねばならぬ。神は、更に高度の知恵もあり浄化を遂げた霊を通じて、命令を伝え給う」

〔三四五〕 霊の視力には、人間のようには、視界があるのですか。

「ない。それは本人しだいである」

〔三四六〕 ものを見るのに、光が必要ですか。

「ものを見るのに外界の光は必要ない。自分の力によつてもものを見る。暗闇があるとすれば罪の償いのため、自らの目を開くためにある」

〔三四七〕 霊は、離れた二点を見る時、動く必要がありますか。例えば、地球の両半球を同時に見ることが出来ますか。

「霊は思想の速さと同じ速さで動くことが出来るから、同時にあらゆる処を見ることが出来ると言える。霊の思念は同時に多くの地点に向かって放射される。だが、この能力は霊の浄化いかんによつて違ってくる。未完成の霊はその見える範囲も狭く、高級霊になると、一望のもとに全体を見ることが出来る」

〔三四八〕 靈は、我々同様に、はっきり物を見ますか。

「もつとはつきり見える。人間には障害になるものでも、靈の視力はそれを通過して先まで見えるから、これを遮るものはない」

〔三四九〕 靈には音も聞こえますか。

「聞こえる。人間の鈍感な耳には聞こえない音でも聞こえる」

——音を聞く能力は、ものを見る能力と同じように、どんな靈にも備わっているのですか。

「靈の聴力は靈の本性であつて、靈の一部をなしている。肉体にある間に、肉体器官を通して初めて音は聞こえるのだが、肉から解放されて自由になると、もはやその聴力は、制約がなくなる」

〔三五〇〕 感覺能力は靈の本性だとすれば、嫌な時は、その感覺を受け取らないでおくことが出来ますか。

「靈は、自分で見たい聞きたいと思うものだけを、見たり聞いたりするのである。い

や、これは高級靈の場合が特にそうなのであって、未完成な靈の場合は、無理に見させられたり聞かされたりする。場合によっては、本人の意志に反しても、その改善に必要なものは、何でも強制される」

〔三五〕 靈は音楽が好きですか。

「音楽とは地上の音楽のことか。靈界の音楽は地上の何ものをもってしても表現できない調和があり、とても地上の音楽の比ではない。それは原始人の叫びと、至上の妙なるメロデーの差がある。だが低い靈魂は、能力が足りないもので、地上の音楽を喜ぶだろう。靈の感覺能力が進歩すると、音楽は無限の魅力となる。この音楽とは靈界の音楽であるが、それは靈の想像をもってしても、これほど無尽の美と喜びを表現したものはない」

〔三五〕 靈は自然界の美を感じることが出来ますか。

「自然の美は各天体によってそれぞれ違っているから、そのすべてに通曉することはとても出来ないが、靈の能力に応じて、部分的にその美を味わうことが出来る。し

かし、高級な靈はこまごました美を超えて、一大調和をもった美を享受できる」

〔三五三〕 靈は、私共のような肉体的欲求をもったり、身体的苦痛を味わったりしますか。

「靈といえども、過去の経験からそれを知っている。しかし、人間のように肉体的にそれを経験するわけではない。彼等は靈だから」

〔三五四〕 靈は疲労を感じたり、休息の要求をもったりしますか。

「靈は人間が考えるような疲労は感じない。従って地上的な意味の休息を必要としな
い。そもそも靈には疲労するような肉体はないのだから。しかし、靈はいつも活動
しているわけではないから、休息しているのではないかと言われるかもしれない。確
かに靈は肉体的な活動はしていない、その活動はすべて思想的活動である。だから
その休息とは精神の休息、つまり思想が非活動的となつている状態、思念がある目
的に向かつて放たれていない状態である。これが靈の休息であり、肉体の休息とは
大變違った意味の休息である」

〔三五五〕 靈も「つらい」と言うことがありますか、その辛いとはどういうことですか。

「それは精神的な苦しさを言っているので、これは肉体的苦痛以上に、霊には苦しく感じられるものだ」

〔三五六〕 霊も、寒いとか暑いとか言うことがあります、あれはどういうことですか。「霊のそういう感じは、地上生活中の記憶の再現なのであって、しばしば本当のように感じるものだ。また、単なるゼスチュアにすぎない場合も多い。というのは、霊が自分の状況を説明しようとしても、うまい表現が見つからない時、そういう方便を使うわけである。また、霊は地上の肉体を思い起こすと、暫時は人間と同じような印象をもつものだ。それは丁度、諸君がコートを脱いでも、なお肩にコートがあるように感じるのと同じだ」

〔三五七〕 (霊の感覚についてのカードデッキの注解) 略

試練の選択

〔二五八〕 遍歴の状態にある靈が、再生に入る前に、次の人生で起こることを予見しますか。

「靈は独力で、やがて自分が受ける試練を選ぶ。靈の自由意志とは、実に、この選択の自由の中にある」

——では、懲罰として、人生の苦難を課するのは神ではないのですか。

「何ごとも、神の許可なしには生じない。何となれば、宇宙を支配する法則を定められたのは神であるから。諸君も右顧左弁せず、何故に神がそのような法を創られたかを探究した方がよい。神は靈に選択の自由を授けるにあたり、自分の行為とその結果に全責任をもつように委ねられた。人は何でも思いのままに出来る。前途には正道が開かれており、同じく誤りへの道も開かれている。しかし、もし彼が敗れたとしても、慰めの道は残っている、万事はそこで終ってはいないのである。しかも、神は善なるかな、彼はもう一度やり直すことも許されているのである。更に、諸君がここで心得ておかねばならぬことは、神の御意志の仕事と、諸君の意志の役割とは違うということ。もし危険が諸君の身に近付いたら、その危険を創ったのは